

在財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部副支部長

愛媛シベリアを語る会副会長

菅さんは高齢にはなられましたが、大変お元気で
す。平成八年夏に松山市にて、四国で初めての「シベ
リア抑留絵画、慰霊墓参写真展」を開催するにあた
り、大変御協力いただきました。

菅さんは、良い意味での「古武士」の姿を彷彿させ
る風貌と潔癖な性格は、我々の信頼の的です。晴天の
日は夏冬を問わず毎日午前中、ゲートボールに熱中
し、いつも寄り添うように横におられる美しい奥様
も、終戦時、混乱の北満、ハルビンで女の身一つで苦
しい体験を経て四年ぶりに無事帰国でき、再会するこ
とができました由。いつまでもお二人が仲良く、平和
で静かな老後を送ってくださるようお祈り申してお
ります。

(愛媛県 山本 繁夫)

捕虜と黒パン

愛媛県 鹿島 智夫

満州最後の日

満州を去る最後の日であった、屠所の羊のように引
かれていた私達の目の前に突然川が現れた。「いよいよ
来たか」皆が口々に呟く。覚悟の身には些かの驚き
もない。近づくに従って川幅が広くなり、ロシアの岸
辺がかすんでいる。三キロくらいの幅であろうか、日
暮れになって夕日が沈むにつれ川は血の色に染まっ
た。悲劇に終わった満州をこの時程哀しく思ったこと
はなかった。神秘とも荘厳とも言いようのない真っ赤
な、そして大きな夕日であった。私の側に座っていた
滝田竜夫伍長が突然立って夕日を拝む。そして、「こ
れが満州最後の日だ、皆で拝もうではないか」。最後
を惜しむ気持ち皆にもあったのであるうか、一斉に
十人ばかりが立って夕日に手を合わす。

この時、突然に、全く突然に赤い夕日の歌を歌い出した者があった。すると次々に唱和する者が増えて、十人余りの一団は赤い夕日のコーラスに湧いた。夢果てた満州で最後の歌であった。その夜は板囲いの大船に乗り、アムールの河で一夜を明かした。八日の朝アムールの河岸に着いた。初めてロシアへ渡り、アムールの河岸に立った。振り返って見ると満州の岸辺は霧に包まれて煙っていた。遠い日の記憶のようで切ない思いであった。

夢果てて、すべては終わった自分の運命をしみじみと思っていたが、すっかり諦めてみると悩みのない子供のようで一時はしゃいだ。その中で私は思わぬ暗示を受けた。今日九月八日は俺の二十七歳の誕生日だ、今ここで生まれ変わったのだ、シベリアの男だ、シベリアの寒さくらいに負けるもんか、ナーニくそ、天を睨んで突っ立った。そして野獣のように唸って低く呱呱の声を上げた。私の思いを知らぬ戦友たちは皆静かだった。私は川に入って濁っていた喉を潤した。その夜はロシア兵の上げる照明弾がスルスルと美しく輝

き、九月の月が中天に冴えて、戦勝に酔うロシア兵が夜すがら歌い眠れない夜であった。そしてテントの回りを銃を逆さに動哨する。この夜の景色は半世紀すぎで私の脳裏から離れない。

赤の広場

アムールの岸で十日余り過ごした北村中隊がクイブシェフカの町の収容所に入ったのは九月下旬であった。既に収容されていた者たちを合わせておよそ千五人ばかりが赤の広場に集まった。捕虜といえども千余の大勢が集まるとさすがに壯観である。その日は黒雲みなぎり、音荒く霰あられがたばしる、遠くに雷鳴がとどろく寒気立った一日であった。

暫くして捕虜の前に勲章を吊った二人の大男が現れた、ロシアの將軍である。傍らに日本人の通訳が立つ。背が低く哀れを感じる。ソ連の將軍が大声で何かを怒鳴る。怒っていることに間違いない、語尾が鋭い。咳一つする者のない一時、これを通訳する日本人の一語一語は、我々の肺腑をえぐる程に恐ろしい言葉であった。「四十年前の恨みがあるからそう思え、日

露の役の償いを覚悟せよ」。そう言った途端に通訳はよろよろとして土の上に座り込んだ、立っている気力が抜けていたのであろう。

ロシア將軍の言葉はそれのみに終わったが、全く悪夢のような一時であった。私は思わず自分の頬をつねってみた。やっぱり現実だ、夢ではない、心のなかで呟いた。

メルゼン収容所

北村中隊が原野に降ろされたのは九月末頃であった。吹雪まじりで茅の根元に雪が見えていた。四台のトラックにてアムールの天幕張りの収容所から運ばれたのである。一軒の家もない丘陵地帯に我々を降ろすと、何も言わず車は逃げるように走り去った。全くわけの判らないまま進退極まった中隊長は、全員を集めて声を震わせた。「ロシア兵は何も言わず逃げてしまったから何も判らぬ。しかしここで死ぬるわけにはいかん。食い物もないが凍え死んではいかん。皆で茅を刈ってその上に寝よう、テントを張れば大丈夫だ。急いでやらんと日が暮れる」。

中隊長の悲壮な激励に全員奮い立った。茅を刈るといっても鎌がないので手で刈らねばならぬ。兵の多くは茅を手で刈った者はないので、農民出の兵たちが出て刈るコツを教えてやる。こうして一束ずつではあったが何とか集めることができた。先ず床に二尺、周囲に二尺厚みくらいに積み重ねて漸く日没までにテントを張ることができた。しかしテントの繋ぎ目は隙間だらけなので風が吹き込み震えるばかり。眠ることはとてもできない夜であった。身につけたものは一切合切離さぬ習慣はシベリアへ引かれた時から当然であったが、この夜は横になることはできなかった、互いに背中に抱きついて座ったまま一夜を明かした。

また、口に入れるものは何一つないので餓死と凍死を覚悟していた。この地点から約五百メートルばかり離れた所に小さな茅葺きの小屋のような形のものがあった。この住人であろうか大豆玉を一つ持って歩いている老人がいた。これを見つけた捕虜たち十人ばかりが老人を襲った、仰向けに倒れた老人の大豆玉に皆の手が伸びる。固い大豆玉は凍っているので、手でむ

しつてもなかなか崩れない。大豆玉の端を掴んで離さない者、突き飛ばされて転ぶ者、少しむしって口に入る者など、まことに浅ましい限りであつたが、私は近寄れなかつたので見ていただけだつた。幸い老人はいつの間にか逃げてしまつていた。怖ろしい目に遇つたと思いつつ日本の捕虜を哀れんだのであろうか。メルゼン収容所は阿修羅像のように醜に残っている。

この翌日、ロシアの小型トラックが少量の馬鈴薯と平釜を積んで来たので皆の心が落ち着いた。そして隊長が、ここは墓場であり、メルゼンという所で、テント張りがそのまま収容所になると宣告した。茅をたくさん刈り、床や壁を厚くして三日目より墓掘りを始めた。墓場一帯の茅を刈り、石灰で約四メートル間隔ぐらゐに丸い印をつけ、一人ずつ掘るようにしている。軍隊の十字鍬は小さいので、凍つた大地ははね返すばかりでなかなか掘れない。一日に深さ一尺も掘ればハラシヨラポータと褒められる。茅の根は閉じ合つているので土がさばけ難く、全く能率が上がらない。直径二メートル、深さ約五十センチ掘るのに私は四日か

かつた。これでも良く掘つた方であつた。しかしこの翌日に風邪をひいて、ちょうど来合せていたロシア人のトラックにてクイブシェフカの収容所に運ばれた。この収容所で風邪は治つたが、体調は三級の部類になつた。一、二級は労働に堪える者、三級は軽作業、四級は入院患者で、捕虜の体調に依じてのロシア側の方針だということであつた。

それから後メルゼンの使役に出た。六十体の亡骸をトラックに積み、墓に埋めるのであつた。ロシア兵が車を墓穴の縁に着け、足でずり落とす。高く積んだ捕虜の体は丸太のように音を立てて崩れる。雪の中に埋葬される戦友たちの最後の姿である。思わず同僚と二人で掌を合わす、この穴に落ちた同胞に雪をかけるのが私と二人の捕虜の使役であつた。これは、夜な夜な狼が遺体を喰ひ荒らすので守るために雪を厚く被せるのであつたが、附近に雪が少なくなると離れた所から運ばねばならなかつた。我々は戦友たちの霊を守るために心をこめた。墓穴は約五十メートル四方くらいあつたやうで、埋めた数字を記入した一メートルくらい

の小さな角材が四、五本立っていた。それには42と62が書かれていた。その外は覚えていない。この墓穴はその後凍って掘れなくなり、ダイナマイトで掘るようになったということであった。

中隊員百人ばかりのうち七人が突然私を訪ねてきた。軍隊時代からの仲の良い友ばかりであるから懐かしさがこみ上げる。竹内、水野、横洲、谷野、大山、小原、森本、この七人が「元氣そうでよかったのう」と喜んでくれた。風邪をひいて一番早くクイブシェフカの病院に送られたのでみんな心配していたらしい。「鹿島、元氣そうでよかったのう。メルゼンの者は皆死んでしまった。生き残ったのは俺ら七人だけじゃ。それからもう、木の内が死んだぞ。『鹿島に会いたい、鹿島に会いたい。鹿島の恩はよう忘れん』と言いながら死んだ」、竹内が喉をつまらせながら言ってくれた。そうだったのか、私は涙が溢れ出て止まらなかった。

親友

千人余りのクイブシェフカの收容所には立派な人格者が多かった。戦友、谷野彪次郎もその中の一人であ

る。満鉄の重役で理事の肩書をもつ。陸軍中将と同格くらいということであった。孫呉の二〇二部隊に入隊し、私と同じ加藤中隊二分隊一班に肩を並べて寝た刎頭の友である。無差別な召集令状をうけて、十八年六月に入隊した。五十一歳は軍隊生活には戸惑いを感じたようで、古年兵から度々怒鳴られていた。物言いが静かなため気迫がないというのである。一度は班に入る時、直立不動の姿勢で実行報告をしなければならぬのに、していない、また声が低い。「貴様、内地気分を出しやがる」と言ったかと思うと中村という小兵長が木銃を持って谷野の胸を突いた。谷野はよろめきながら尻もちをついた。ほかの古年兵たちは見ていたが何も言わなかった。私は撲りつけたいほどだったが、軍隊ではどうすることもできなかった。この時以来私は、軍隊に対する疑問と侮蔑を抱くようになった。

捕虜になってから私はこの谷野に全然会えなくなっていた。ところが戦友から谷野が医務室で養生しているとの報せを受けて気が気でならず、数日後に使役を

終えた後、用意していた継ぎボロと木綿針、それにロシア婦人からもらった馬鈴薯を持って医務室に入った。シベリアへ来てから初めて会う谷野である。心が弾み懐かしさがこみ上げる。谷野はストープに当たっていた、ひどく瘦せていた。「谷野」と声をかけて傍らに寄りながら私は愕おどろいた。上着もズボンも汚れて破れている。「どうしてこんなに」、問う前に私は直感していた。悪い奴が多いからおとなしい谷野は差し繰られたのだ。寝ている間に、また入浴している間に、悪い奴が差し繰るのである。そう思いながら持ってきた品々を出して見せると谷野は大声を上げて泣く。部屋中に響く大声である。傍らにいた一人の老人も声をひそめて激しく咽なげび泣いていた。身の痛みには泣かぬ大の男が大声で泣くのである。谷野にしてみれば、人々の師表と仰がれた身であっただけにその悲しさは人一倍深い、慰めてくれる者のない身を思いつつ、己の涙で己を慰めているのである。

谷野はその後経歴が判ってロシアの新聞社に勤めた。今までになかった大きな掲示板が門に掲げられ

て、谷野の書いた論文が毎日に公開された。大した人物がいるものだと、朝昼夕、読む者が多く、ロシア側もハラシヨハラシヨと褒めていた。その中で私は「民主主義の新日本」と題する論文には目を見張った、この論文は四、五日続いた。これからの日本の進むべき道は民主主義をおいてほかにないという点を強調していた。私は民主主義という言葉さえ知らなかったのだ、今さらのように谷野の博識に驚いた。また読めない漢字がたくさんあったことにも驚いた。こんな大人物である谷野は軍隊時代から一切素性を明かさなかった。私が大きな喜びと誇りを抱いていたのも束の間、その後谷野に再びめぐり会うことはなかった。生死不明のままである。

線路の雪掻き

クイブシェフカの駅の雪掻きに凍え果てた戦友小原は十八歳の命を果てた。メルゼンの墓穴掘りから生き残って私を訪ねてくれた七人の中の一人である。

瘦せ衰えていたので生きていたとは思えず一カ月余り過ぎていた。その日は猛吹雪であり、シベリアの寒

さがひとしお身に沁む朝であった。零下六十五度、吐く息が白くまつげにへばりつき、顔がこわばる。二十人ばかりの捕虜は防寒帽を目深に被っている。誰であるかは全く判らない。駅に着くと皆スコップを持ち足踏みをする。片時もじっとしてられないので足の指を動かし、また、大手套の中でも指を動かし、スコップの柄を上から押さえるようにして雪を掻く。

こうしてやっと動くだけの私達の作業を見ていたロシアの監督は腹が立ったのであろうか、ダバイダバイと怒鳴り声を上げた。しかし捕虜たちの動作は相変わらず鈍い。何度も声を荒らげていたこの監督は遂に私達に銃口を向けて威嚇した。今までいろいろな使役に出了がこんな監督は初めてであり皆驚いた。この男はアイヌ系であり、頭髪と目が黒く体も小さく顔色も黄色を帯びていて日本人に似ているので何とも憎らしい男であった。私から少し離れた所にスコップを振らないでじっとして立っている一人がいた。じっとしているのは弱っている証拠で、凍える、そう思っよく見ているのを見たらスコップの柄に手をのせ顎をのせている。こ

れはと思った瞬間、棒を倒すようにバツタリと倒れた。近くにいた者たちが駆け寄って起こしたが、既に息絶えていた。これが軍隊時代からの友、小原であった。義勇隊からシベリアへ抑留され、肉親に看取られることなく命を果てた。

紅顔の明るい美少年であった。若い捕虜たちは拾い食うことをせずして作業に精を出す、従ってよいに体力を消耗する。常にプライドを持って生きてきたこの純真な小原を憶いながら、高知県の故郷に還っているであろう御霊に五十年過ぎた今も思いを寄せ、そのご冥福を祈っている。

クイブの収容所

クイブシェフカ収容所は赤の広場の町の収容所であり、元囚人たちのいた所だそうで、鉄条網を二重にめぐらした獄舎であった。戦勝により囚人達を解放した後、日本人捕虜収容所と変貌し、一部二階建てであり外観も偉容を放っている。内部は三段の棚造りに急造されて、千人以上の捕虜がひしめく。一区切り約二メートル四方くらいで十二人が頭と足を交互にして寝

る。両足は伸ばせないので片方は必ず立てて寝る。しかしこの窮屈な寝床は十日間ばかりですっかり広くなつた。死亡してゆく者が日に日に多くなつたからである。

この収容所で一番驚いたのは浚きつたどぶのような食である。真っ黒でどろどろして、とても食べ物とは思えない。二日くらい一口も食べる者はいなかった。スプーンで掬ってみると凍つた馬鈴薯の爪程のものが黒くなつていた。凍みたものはなかなか煮えない、それに恐らく洗つてもいけないのを釜に放り込んだものと思えなかつた。しかしこれとて食べねば飢え死ぬ。一口ずつ食べて腹を撫でる者ばかりであつたが、この頃から死者がどんどん増えてきて、連日十人二十人、今朝は五十人死んだなどと平気で話す声を幾度も耳にした。当然栄養失調と凍傷である。このどぶのようなものが三カ月続いた。それから大豆食になり、これも三カ月続いた。こうしているうちに青草の萌ゆる五月になつたが、この大豆食に代つた当時はまた驚いた。大豆はきれいに炊けているし栄養もあるので命の

心配はなかつた。しかし喜んだのも束の間で、飯盒の中蓋に七粒しかなかった。汁が少しあるだけでこの状態が三カ月続いたが、その間にただ一度だけ十四粒あつた。この時は大変嬉しかつた、どうせ長い命ではないと常に観念していた私には思わぬ僥倖でもあつた。

大豆食

大豆食になり、パンが各班に配られるようになって、これを切り分ける班長が決まつた。K上等兵である。マッチの小箱程のものであるが、余分に付けられるものであるから皆の目が輝く。班員七、八人車座になつて切り分ける班長の手元を見つめる。時々倍くらいに切るのが二つか三つくらいある。大きいのは上等兵から古年兵と、階級に応じて小さくなつている。どうして上等兵に倍くらいにするのか、作業は皆同じではないか、捕虜同士で納得できぬと陰で不満をかこつ者は多かつたが、食べ物のことであり誰も口を割る者はなかつた。

この矛盾に悩んで、何とか見まいと目を反らしたり瞑つたりして二カ月程過ぎた。食に飢えている捕虜に

とっては、まさに生殺与奪の権ともいふべきこの班長の手元を見つめる皆の目は毎日に厳しくなる。俺のパンは皆より小さい、そう思うとよけいに腹が減る。見まい、思うまいと心の葛藤が続く、誠に耐え難い日々が続いた。悩み抜いたある日、私の脳裏にふと神の啓示のように一つの言葉が閃いた。「俺のパンの小さいのは、神様が満州に残している妻や子に分けているのだ」、紛れもない私自身の心の叫びである。ハッと私はうつつむいたままであった、とめどなく涙が流れた。この俺が還るまで元気でおれよ。

それから後、食事の度に見るパンがどんなに大きかろうが小さかろうが、決して気に病むことはなかった。その後内地帰還まで空腹を覚えなかった。これらもしかしたら苦悩から脱却した悟りのようなものだろうか、いやいや凡庸な身にそのようなことが起こり得る筈はない。私は何度も打ち消していたけれど、これは偽りのない事実なのである。この不思議な体験を私は最も仲のよい横洲に話した。五十二歳の横洲は農家出身で丈夫な方ではあったが、冬を越えて瘦せてい

た。共に老少不定の身と慰め合い励まし合っていた。横洲がパンの悩みから少しでも抜け出すことができたという私の老婆心のようなものからであった。

パンに悩む

パンの悩みから解放されて十日ほど過ぎた頃、外から帰って班内に入ろうとしたが、皆が黙って立っている。滅多にないことだし、ただならぬ気配が漂っている。その沈黙を破って出た言葉は誠に恐ろしいものであった。「俺がパンを切る手を背後から叩くから皆でのかかってゆけ。俺がその包丁を取って班長を刺す」、何ともやくざのような恐ろしい言葉である。皆黙って一言も言わない。あまりにも唐突で陰惨な言葉、しばらく沈黙が続く。「皆どうした」その時一人が口を切った。「班長に腹は立つが、シベリアまで来て殺し合いをすることはやめようや、親や子もあるからなあ」、班内でいつもおとなしい岸田であった。すかさず私が賛成した。「そうだ、岸田の言う通り、皆で内地へ帰ろう」、全く咄嗟に出た一言であったが、皆何も言わずそのまま済んだ。それから後、パンのこ

とを口にする者はなかった。僅か数分間の出来事であったが大事に至らず胸を撫で下ろした。後で私は岸田の分別のある言葉を讃えた。「君が言ってくれたからだよ」、岸田はポツリと言ったきりだった。何とも言えない嬉しい一日であった。

便所の使役

約千人を擁するクイブシェフカ収容所の便所は広い。溜の深さ約二メートル、小屋の長さ約四十メートル、幅約二メートル、十カ所くらいに区切られており、踏む所だけ十五センチメートル幅の五分板が二枚渡されている。腰板にはバラ板を詰めているが、上方は一枚分くらい空いている。時には人の尻を見て用を足す。また、雪の日は舞い込む雪が臀部を濡らす。入所以来四カ月程経ってから私達はこの便所の使役に当たった。スコップと十字鍬を渡されて便所に入った。吹きさらし同然であるから臭いもない。六人それぞれ適当な場所に入り、柱のように立つこの異様な糞柱を叩いた。横に叩くといとも簡単に一尺くらい倒れた。案外世話のない使役だと高をくくっていた。とこ

ろが低くなるにつれ十字鍬が届かない。嫌が応でも降り、溜つぼの中に入らねばならない。六人それぞれ下に降りて叩いたがビクともしない。入所当時のものは大小便共に流れて広い溜の中で漂っていたのであるが、自然に寒くなり、あたかも広い海底の岩盤のように広がっており、それがそのまま零下六十度の中で氷の塊となっているのだ。叩くだけではどうにもならぬので十字鍬の突った方で少しずつ穴を開け、ひびを入れると意外に砕けやすく、幅の広い方でかき寄せ、スコップで外に放る。実に思わぬ重労働で、何となく白羽の矢に当たった思いがした。

誰も口をきかない。全くの無言のままである。作業は思ったよりはかどったが、叩く度に粉雪のように飛び散るので嫌な思いは絶えぬ。吹きさらしの便所は凍りついて臭いも感じないが、顔に散って解けるとかすかに臭う。六人は黙ったまま糞柱を肩にしたり、二人で抱えたり、スコップにて外に放った。作業は三分の一にも及ばなかったが時間いっぱい働いた。この時の糞の粉は防寒帽の隙間や襟元から入り、また外套のポ

ケットにも溜まったはずで、班に帰ってから防寒帽で服を叩いた。顔を洗うこともできない捕虜の身である。服を叩いていつものように靴と外套、防寒帽を脱いで床についたが、二、三日糞の臭いがつきま続た。六人とも初めから終わりまでただの一言も物を言わなかった。

丸太切り

師走も押し詰まった頃、私は義勇隊出身の大山と丸太挽きを命ぜられた。その日は朝チラチラと粉雪が舞って穏やかな日であった。将校の官舎の前に十本ばかりの大きな丸太が積まれていた。この中の一番小さなのを切れということで二人挽ぎの大鋸を渡された。開拓時代に使ったことがあるので親しい感じがした。大山は初めてなのでいろいろと教えながら切っていた。

官舎の横の一番近い所に二軒小さな家が建っていた。この家の手前の門の扉を開けて私達の方を気配りしながら見ていた婦人がいた。いきなり小走りに寄ってくるや、「ヤボンスキ・クレバ・クウス(訳・日本の兵隊さ

ん、寒いでしょう、小さなパンだが食べなさい)」。この言葉は三級だったころ官舎の婦人たちからよく聞いていたので判っていた。本当に丁寧な言葉で寄ってくるや、大山と私のポケットに大きなパンを押し込んだ。あまりにも突然であり、思いがけぬこの若い婦人を仰いで、「スパシイボ、スパシイボ」をようやく言った。胸つまって私と大山は大声を上げて泣いた。シベリアへ来てから初めて大声で泣いた。悲しかったのか嬉しかったのか、私にはよく判らなかつた。私達の泣くさまに驚いたのか、婦人は後も見ず帰って行った。

気がついてみると大山と私は婦人の後ろ姿に掌を合わせていた。「大山もう泣くな」、泣き止まぬ大山を私は何度も慰めた。十八歳の大山は多感である。きっと故郷の母を憶っていたのであろう。そう思いながら、私も母を、妻や子を思いながらしばらく涙にむせんだ。膨らんだポケットに手を当ててみると大手套に温もりが伝わった。私達を見てわざわざベチカで焼いてくれたのである。大山はその後二十日ほどして亡くな

ったということであった。ロシア婦人の温かいパンを頂いて安らかに世を去ったことはせめてもの安らぎであった。そしてかのロシア婦人は幸せにいるだろうか。婦人の似顔絵を画いてすでに五十年、世は移り変わっても心の中にこの優しい婦人のおもかげは消えることはない。その名を知らぬことが哀しい私である。

炊事当番を襲う

今まで静かだった班の中が急にざわめき、バタバタと皆が外に出る。走りつつ門を出て私は安然とした。三十人ばかりの者が脛をついたり、つくばったり、また両手をついて土の上に流れている黒い雑炊を掬いながら、また掻き寄せつつ食っているのである。門から出てきた者達が次々にこの中に割り込む。手で掬えなくなってきた者は舌でねぶる。飢え果てた捕虜たちのあらゆる浅ましい姿である。この様子を見ない者は本当と思えないだろうが事実なのである。飢え果てた捕虜たちが飯上げから帰って来る炊事当番を襲ったのである。その頃は飯盒を持って一つに六人分を入れて貰い、各班で一人一人に分けていたのであるが、炊事係

が厄介になったのであろうか、一度に大きな飯缶に入れて運ぶように方針を変えた。よく守られて順調に行われていたが、二、三の班が帰ってくる時間を待ち合わせて一度に襲ったのである。

私はこの何とも卑劣な浅ましい行動を一部始終見ていたが、とても恥ずかしくてこの中に割り込む勇氣はなかった。人数は俄に増えて最後には五十人くらいになつていた。空になった飯缶が広げばに一つ転がっていた。班内では皆この暴動のようなことは誰も言わなかった。このため一食分欠食になって残念でもあり腹は立ったが、捕虜たちは皆飢えの極限にあった。恥も外聞もなかったのであろう、身を省みることはできなかったに違いない。「このままシベリアで死んではならぬ。内地には母や妻子が待っている、片足になっても生きて還らねばならぬ」と、一粒の豆に、一匙の飯に命を託した者たちだ。明日をも知れぬ命を引きずる如く生きている者もあるだろう。決して餓鬼に陥っているのではなく、むしろ愛の権化だ。「あれを食べて命をつないだ者があるかも知れん」、私は一人で納得

した。

砂漠の砂積み

使役の日は朝通達があるが、この日は何の連絡もなく、若い男がトラックに乗れと私と横洲をうながす。何をするのかさっぱり判らないままトラックに乗ると、スコップを四、五丁と丈夫な麻のロープを投げこみ三台の車で一時間近く走った、砂漠地帯であった。輝いていた太陽がボンヤリとして、光のないボールのように見えて幻のようである。青いものは全然なく、自分の手にも足にも車にも影がない。気がついてみると地平線の果てに三つの竜巻が立っていた。巨大なのでこれに出遭うと近くても遠くても車ごと空高く巻き上げられるという。辺りに竜巻の跡であるう砂を取った起伏が所々に残っていた。適当な所に車を着け、スコップを投げ下ろして、「ダ、バイ、バイ（早く早く）」、遂に「ブイストラダ、バイ・ブイストラダ、バイ（じゃんじゃんやれ）」と怒り声で言う。私達は死に物狂いで砂を積んだ。

この砂取りでは時々犠牲者が出ているそうで、万一

に備えて必ず三台で行き、埋まった一台を二台で引き出すそうだ。私は相当たくさん砂を吸い込んだようで、ベッベッと砂を吐き出す日が三日続いた。水は食事にすることはないので喉がカラカラに渴いた。横洲と私は一日だけ使役を休ませてもらった。

馬鈴薯の皮

使役を終えた捕虜たちが飯盒を腰に帰ってくる時間は午後四時ごろである。門衛が一人立っているが、いつも同じ門衛で顔見知りであるからニコニコとして機嫌が良い。ところが一人の捕虜のポケットがあまりに大きかったので不審に思ったのであろうか、咎められた。おずおずとしながら手に掴み出したものは馬鈴薯の皮であった。怪しんだ門衛は今度は飯盒を見た、中からやはり詰め込んだ馬鈴薯の皮が出た。このことがロシア側の将校に報告された。

翌朝、捕虜全員、集会所に集まれとの通達があった。全員何のことが判らぬまま二百人ばかりが大広間に集まった。驚いたのは食台と椅子がキッチンと並べられており、約二百人分くらいのコップが置かれてい

た。また、水がコップに七分目くらいまで注がれていた。全員席に着いたころロシアの将校が現れて、開口一番大声で怒鳴った。「日本の軍隊には階級制度というものが全く不快だ。これで飯を食うとは何事か、捕虜に階級制度があるかっ、みんな一緒だ。使役の者達がカルトーシカの皮を拾って食べるといいうが、とんでもない話だ。ロシアは国際法に従ってカローリを守っている。明日から飯はここで食うことにする」、通訳はロシア将校の怒りをそのままぶつけて、私達に訴えている。まさに溜飲の下がる言葉であり、涙の出る程嬉しい言葉であった。

この時、入所以来八カ月目に私達は初めてコップの水を飲んだ。このコップの水の甘かったこと、神から頂いたもののように口の中で含んでいた。この時、私の隣にいた一人が、私のコップを覗いて少し残っていたのを見て「オイ俺に飲ませろ」、その横柄な物の言いようから将校だと直感した私は癪にさわった。「ナニニ、何を言うかっ」、少し声が荒かったのか相手は何も言わなかった。近くにいた戦友たちが常にない私

の剣幕に驚いていたが、清々とした気持ちであった。あれほど言っておいたから日本側も守ってくれるだろうとロシア側は思ったのであろうが、翌日からまた元のとおりであった。権威あるロシア側の配慮がどうして通らなかつたのか、いろいろと疑問を抱く者は多かつたが誰も詮索するには至らなかつた。その後食料はだんだんと良くなり、雑炊のように炊いたロシア麦が出るようになり、ジャガイモの皮のお陰だなどと冗談が出るほどになった。

青草

五月頃、横洲と私はコルホーズの使役を命ぜられた。コルホーズには二頭の牛が飼われていた。カルチペーターやブラオが小屋の中にあつた。この農具類はかなり使つたものか、鉄の先が丸みちびて光っている。のんびりと牛が啼くので開拓時代を思い出した。農夫らがとても人なつこく二、三人寄ってきて、スコップを二つ出して、これで牛舎の糞を出してくれと手振りをする。開拓地で常に馴れていた仕事なので手際よく一時間くらいで作業を終えた。農夫たちはハラシ

ヨラポータを何度も言つて作業は終わったと言うので、二人で畑の傍らの蓬をむしり食つた。まだ五、六寸の丈だったが、萌え出たばかりだったので甘かつた。にがい筈の蓬が少しも苦くない。腹いっぱい食べて飯盒にもいっぱい詰めた。これで一年分くらい命が延びたぞ、喜び合いながら唇を見ると真っ青である。指で互いにこするがなかなかとれない。五十メートルくらい離れた所に水溜りがあった。牛の飲み水や道具を洗うために掘つた直径二十メートルくらいの溜である。濁っていたが天から授かつたもののような気がして、二人で溜りの縁につくばい、口から出るまでこの水を飲んだ。シベリアへ来てから初めてガブガブと飲んだ水である。帰りには農夫が飯盒に入れよと馬鈴薯を持ってきたが、蓬を詰めていたのでポケットに入れてもらった。

ロシア人の喧嘩

私は絶対手を触れないロシア人同士の喧嘩を見た。それは私が土煉瓦を作る使役に出了た時のこと。練つた土を木の枠の中に入れて上に抜くだけのまことに簡単

な作業である。これをならした広場に並べて置けばよい。後ろさがりに縦横見計らつて順序よく置くと、数もよく判るし、見ても美しい。見に来た係の人がハラショハラショとしきりに悦んでくれた。ところがもう一人の男は雑然と置いているので数も判りにくい。ノルマに達していない。見に来た事務所の人が、教え方が悪いというような口ぶりで喧嘩になつた。遂に声が高くなり怒鳴り合い、今にも掴み合いそんな剣幕になつた。見ていた私は内心はらはらしていた。ところが事務所の人が先に相手の顔に唾を吐きかけた。すかさず労務者も相手の顔に唾を吐いた。遂に二人とも喉の奥から青痰を吐きかけた。二人とも唾と痰にまみれたが、どちらも拭うことなく静かに終わったようであつた。私はいたたまれなくなつたので、静かになる前にそこを離れた。ロシアでは相手を撲つた場合は理由が通らない厳しい法律があり、負けになるのだそうで、国民全体が良く守っているのである。

復員後

シベリアからの復員後は体調が悪く、特に左足は凍

傷にて切断のところを免れたので、軽い凍傷のようなもので感覚が鈍く、フェルトの草履をはいているように、道を歩いて靴の脱げたことがわからず振り返ったことも度々であった。それでも馴れねばならないと思いい歩一歩確かめて歩いた。躓いて怪我をしたことも度々だったが、何とか三十年くらい過ぎた。

当時、愛大の村上節太郎氏が愛媛村開拓団長だった西沢香寿美氏を介して県庁へとのお話もありましたが、お断りいたしました。また戸島村役場へとのお話もありましたが、公職はすべてお断りいたしました。それは汗を流して働くことが好きだったからです。また自分のような世間知らずでも続く筈はないと考えたからです。それに農業は好きだし、開拓地に果てた百人余りの拓友たちを思うと、ペンを持って楽な生活をするのが罪のように思えたからです。また父が納元をしていて三十人くらいの網子を雇っていましたが、体の不自由な私は自由が許されると思い、半農半漁の生活に入りました。畑はポツポツ拓いたり購ったりしながら五反歩ばかりと、山林三反を所有するよ

うになりましたが、そのために無理がたたったのでしよう、五十歳ごろから足腰腕と方々が悪くなり、島を捨てて松山へ脱出しました。

妻も撫順から命からがら引き揚げましたが、長女と男子二人を産み、現在松山で暮らしております。私はシベリアで中隊百二十人くらいの中でただ一人の生き残りですし、また妻も撫順で九十人ばかりいた団員の中で生き残った女性三人（男子も四、五人）のうちの一人居ますが、現在生存者は妻だけのようです。

復員後の略歴

農地五反歩を所有し、半農半漁
桶業の修業をし、虎の巻を頂き、近くへ出職等
村の養豚技手となる
拓友会に度々出席

戸島村引揚者関係の世話

愛媛開拓団殉難碑建設委員会委員

孤児の世話に尽くす

『愛媛村開拓の先駆者たち』を出版

昭和四十八年、松山市へ転出

短歌誌「青垣」へ入会、現在に至る

【執筆者の紹介】

生年月日 大正六年九月八日

愛媛県南予の漁村に生まれ、実家は網元。小学校を卒業とともに青雲の志を抱いて挿絵画家を目指し、日本通信美術学校に学ぶも、大病のため断念する。六年間の闘病生活で健康を取り戻し、昭和十四年、満蒙開拓団に入所。その間、第三副団長、購買・販売係長を務めるも再び病気に倒れ、南地区部落長となる。

昭和十九年六月、孫兵二〇二部隊に召集。二十年八月の終戦後、入ソ、抑留。

昭和二十二年復員後は、家業の巻網漁船に父と従事。昭和四十八年、松山市へ出て製材所に勤める。やはり身体の調子が悪かったが、頑張って人生を生きってきた。昭和三十年には母校、戸嶋村嘉島小学校の校歌を作詞。昭和四十二年には「開拓団愛媛村の先駆者たち」を出版。昭和五十四年ごろから短歌を学び、歌誌

の会員となり、平成六年には歌集『渦汐』を発行。

生来病魔に再三見舞われ、闘病を続けながら現在も頑張っているらしいです。

“正直とまごころ”を座右の銘としている、努力の人です。

(愛媛県 山本 繁夫)

曲想の譜 シベリア

愛媛県 山村 眞

(旧姓 岡原)

私は、愛媛県南宇和郡一本松町に、農家の二男二女の末っ子として生まれた。父は私の幼い時に他界して、母により養育された。大正十三年十二月十二日、即ち戦争の世紀に生まれ、やがて国家の干城として大命を奉ずる運命にあった。

日中戦争は、遂に世界列強を相手として有史以来の大戦争に突入した。緒戦の華々しい戦果に酔いしれた